

鳥取大学附属図書館公開展示

郷土の文化人たら

期間：平成12年11月4日（土）～5日（日）
9:00～17:00
会場：鳥取大学附属図書館玄関ロビー

鳥取大学附属図書館

2000

ご挨拶

このたび鳥取大学附属図書館では、「郷土の文化人たち」と題する公開展示を開催することになりました。

本学附属図書館は、本学教育地域科学部の前身である旧鳥取師範学校が収集した郷土資料を所蔵しております。この中には、郷土に関する文書、写本、刊本の他、旧鳥取藩主池田家関係の書画や郷土の文化人たち（儒学者、国学者、歌人、俳人、書家、画家）の書画が含まれております。

山陰地方は、古代は出雲を中心とした一大文化圏として繁栄し、中世、近世を通して高度な文化を育んできた豊かな歴史を持つ地方です。江戸時代、鳥取は主に鳥取藩を中心に様々な文化活動が営まれ、全国的にも名を馳せた文化人が輩出しております。

今回、本館蔵書の中から、江戸から明治にかけて活躍した文化人たちの書画や関連著作を集め、標記のテーマでの展示を企画しました。ご高覧いただき、郷土鳥取の誇りである文化の先達たちについて理解を深めていただければ幸いです。

現在、大学は地域社会との連携強化が要請されております。大学は社会から隔離されたいいわゆる象牙の塔であってはならず、広く社会に開かれ、その研究成果や学術情報資源を社会に還元することが求められております。鳥取大学附属図書館においては、地域住民の皆様にも広く図書館を開放し、本館蔵書の閲覧や貸し出しを行っているところですが、さらにこれを進めるため、今回の展示会を企画しました。この展示会が、本学と地域の皆様との一層の交流の機会となりますようお願いしております。

どうぞ、ごゆっくりご覧ください。

平成12年11月

鳥取大学附属図書館長

木地實夫

展示資料解説

① 池田吉泰（いけだ よしやす）

鳥取藩第3代藩主。（1700～1739在位）展示資料は、吉泰公手簡である。

② 池田治道（いけだ はるみち）1768～1798

鳥取藩第6代藩主。明和5年3月江戸に生まれる。幼名は岩五郎、秀三郎為智という。天保3年家督を相続した。和歌を好んだ。寛政10年享年31歳で江戸で逝去。展示資料は、治道公筆の和歌短冊と色紙である。

③ 池田慶行（いけだ よしゆき）1832～1848

鳥取藩第10代藩主。天保3年5月、東館池田家当主仲律の子として江戸に生まれる。幼名は亀丸茂高という。9代藩主斉訓公に嗣子がなかったため養子に入り家督を相続した。画を狩野流を主として沖探容に学び能くし、和歌、俳句、漢詩にも秀でていた。嘉永元年鳥取で逝去。（享年17歳）

展示資料は、慶行公直筆の画である。『鳥取藩史』によれば公は馬を好み、良馬養い馬術を善くしたとあり、愛馬の一つを描いたものであろう。

④ 池田冠山（いけだ かんざん）1767～1833

本名は定常、字は君倫、縫殿頭と称した。西館池田家第5代当主。江戸の林述斎に学び、佐藤一斎等と親交があった。古今和漢の書に通じ、虚心坦懐貴賤を問わず交際し、名声が高かった。天保4年病のため江戸藩邸で没した。享年67歳。著書は、『池田家譜集成』外48種、388巻に及ぶ。以後の鳥取における文化振興に与えた影響は大なるものがある。

展示資料は冠山筆の書である。「禅室従来雲外賞」

⑤ 湊百年（たに ひゃくねん）1754～1831

儒学者。名は世尊、字は士達、百年は号である。もと讃岐の人で、江戸、京都、大坂を遊歴し、寛政年間に鳥取に来た。1802年（享和2）藩主斉邦は鳥取に滞在させ、このままこの地で一生を終えた。百年は天文・兵学・医学・砲術（本県における荻野流砲術の開祖といわれる。）など博学多識の人であるが、江戸時代のベストセラーとなった『経典餘師』（展示資料⑩）の著者として有名である。

展示資料は百年の書である。

⑥ 伊良子大洲（いらこ だいしゅう）1763～1829

儒学者。鳥取新町に生まれる。本名は憲、字は子成、後に子典と改め、大洲と号した。安藤箕山に学んだ。大洲は箕山の学風を継ぎ、私塾にあって「徳行」を重視する教育を行った。主著は赤穂浪士の行為を批判した『大洲四十六士論』（展示資料⑱）弟子の柴田温が『大洲集』（展示資料⑲）15巻を出版している。展示資料は大洲の書である。

⑦ 伊藤宜堂（いとう ぎどう）1792～1874

漢学者。名は俊蔵。日野郡江尾（現江府町）に生まれた。江戸の朝川喜庵、佐藤一斎に学び、石州大森、太田で講学した。1835年（天保6）出雲市郊外の上塩谷村で有隣塾を開いた。1862年（文久2）鳥取藩に招かれ尚徳館で周易を講じた。また足羽氏の尽力で開かれた溝口郷校で藩からの補助で教育に当たった。宜堂の著書として『周易包蒙』50巻があるが、出版されるには至らなかった。その精髓はまとめられ『周易包蒙約解』（展示資料⑳）『周易包蒙別録』として出版された。

宜堂は書画にも巧みであり、展示資料はその水墨画である。

⑧ 國本道男（くにもと みちお）1774～1830

国学者、歌人。通称帯刀。八上郡佐貫村（現八頭郡河原町佐貫）の都波只知神社の社司の子として生まれた。幼時より国学に志し、本居宣長の嗣子大平に学ぶ。藩内で国学が振るわれないのを嘆き、衣川長秋を伴い帰り、藩内の国学振興の機運を作った。後、学塾を住地に建て子弟の教育に努めた。著書『皇國明辨』は、啓蒙のために皇国の姿を説き祭政一致を論じたもので、長秋が序文を書いている。道男は歌道にも優れていた。

⑨ 衣川長秋（きぬがわ ながあき）1766～1823

歌人。伊勢の人。本居宣長について国学を修めた。京都に国学校を興す志があったが果たされず、國本道男に誘われて鳥取藩に来遊した。1803年に鳥取藩から正式な滞留が認められ、以後20年、古典・文法・歌道を熱心に教えて、門下は300人を数えた。著作には、『百人一首峯の梯』（展示資料21）、藩内の紀行文『田箆の日記』（展示資料22）『やつれみのの日記』（展示資料23）などがある。古医書『大同類聚方』の校合の目的で上京中、旅先で病み、大坂の門人中島豊足の宅まで引き返したが回復せず58歳で没した。大坂の契沖の傍らに葬り、鳥取には面影山に遺髪を納めた。

⑩ 中島宜門（なかしま ぎもん）1807～1894

歌人。早くから鳥取藩の諸役を務め、尚徳館編集係として『伯耆志』の編纂にも加わった。後には、日吉神社、勝田神社などの神官も務めた。歌道は少年期に衣川長秋に学び、書法もよくした。1856年、鳥取藩内の歌道振興を志し、『類題稲葉集』（展示資料 24）を出版した。家集『回水園集』（展示資料 25）は子の宜行が出版した。

⑪ 森岡永眠（もりおか えいみん）（1802～1858）

鳥取に生まれる。名は保友、永眠は号。京都狩野長常の助手を務めた。御即位式の御襖を描く。絵画のみならず金具彫刻屈指の名人であった。安政5年享年57歳で没した。展示の絵には飯田年平の筆跡がある。

飯田年平（いいだ としひら）1820～1886

歌人、国学者。初名足穂、通称七郎石園と号した。飯田秀雄の二男として気多郡寺内村に生まれた。本居大平、加納諸平、伴信友に学んだ。歌人三平の一人である。鳥取藩は年平が国典に熟達していることを知って1860年国学方雇として藩に召しだした。尚徳館で精励し、同僚とともに「伯耆志」に関与した。明治維新後は朝廷に召されて式部職御用掛として神道振興などに活躍した。1884年に歌集『石園集』（展示資料 26）を出版。『石園歌話』は文学史観も高く特に優れている。

⑫ 土方稻嶺（ひじかた とうれい）1741～1807

鳥取藩絵師。鳥取藩家老荒尾家の家臣の子として生まれた。本姓は後藤、初名を廣邦といい、後廣輔と改める。稻嶺、又は臥虎軒と号した。幼い頃から絵を好み、京都、江戸に出て画技を磨き、画名を挙げた。1798年帰国し藩絵師として召し抱えられた。人物、山水、花鳥、禽獣、虫魚など格調高い作品を描いた。文化4年、67歳で没し、鳥取市景福寺に葬られた。

⑬ 橋本秀峰（はしもと しゅうほう）1796～1883

鳥取藩士林淇園の子として生まれ、橋本喜内の養子となった。初名を成章、のち守雄と改めた。通称は斧蔵といい、晩年秀峰と号した。歌を中島宜門、書を住竜齋等に学び造詣が深かった。世子斉訓に書法を教授し、後には広く藩の子弟を教育した。画は江戸では狩野探淵守真に師事した。1846年鳥取二の丸の新築に当たっては屏風数枚を描いた。廃藩の後、地方に移り余生を送った。

⑭ 青木図南（あおき となん）（不詳～1859）

鳥取に生まれた。荒尾近江の家臣。柴田義童に絵を学び、京都四條派の絵をよくした。取りわけ人物画では並ぶ者が無いと言われ、真に迫った精巧な絵を描いた。

⑮ 根本幽峨（ねもと ゆうが）1824～1866

鳥取藩絵師。鳥取の商家砂田屋の子として生まれた。幼少の頃から絵を好んだ。長じて江戸に出て、鳥取藩絵師一峨について狩野派の画法を学んだ。1858年、優れた画技が認められ鳥取藩絵師となった。数々の優れた大作、小品を残し、43歳の若さで没した。秀峰とともに鳥取狩野派晩年の隆盛期を現出した。展示の資料は、河田樗峰（木挽町の人。狩野派。根本幽峨の弟子で、明治初年頃の人である。）、保光、袖山合作の「亀」を題材とした画である。

⑯ 河村芳舟（かわむら ほうしゅう）1879～1963

画家。邑美郡今町（現鳥取市）に河村鉄次郎の二男として生まれる。名は正吉。早くから狩野派の画法を学び、後に東京に出て、狩野派の橋本雅邦の門に入った。1923年の秋、鳥取市掛出町の妙円寺本堂の襖絵を半年を費やして描いた。鶴嶼は芳舟の若い頃の号。

おことわり

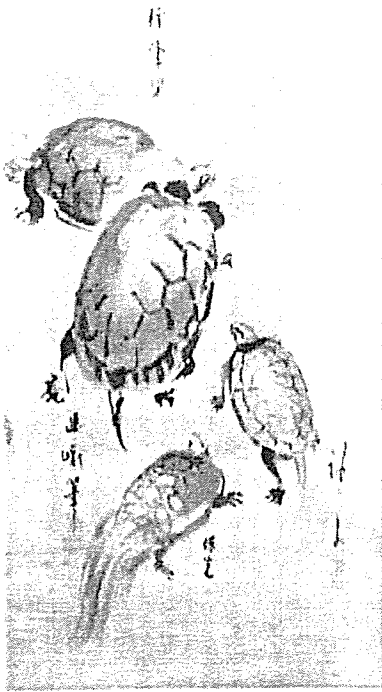
本解説の作成にあたっては、『鳥取県大百科事典』昭和59年新日本海新聞社刊、『鳥取大学所蔵文化財簡報告』昭和63年平勢隆郎氏執筆を参考にさせていただきました。



⑧國本道男筆



⑬橋本秀峰筆



⑮根本幽峨筆



⑯河村芳舟筆